



パソコン用ホームページ URL <https://www.kawaguchi-lib.jp/>

携帯電話用ホームページ URL <https://www.kawaguchi-lib.jp/opw1/IMD/IMDMAIN.CSP>



スマートフォン用 QR コード

携帯用 QR コード



わたしの今年の一冊 2018

昨年お読みになった本の中で、印象に残った一冊をあげていただく「わたしの今年の一冊」は、今回で23回目となりました。たくさんのご応募をいただきましたが、紙面の関係で 30点、掲載させていただきます。

「広辞苑をつくるひと」

三浦しをん／著

岩波書店 2018 年刊 B 813.1/ミ

150 ページほどの文庫本なのに、
なんという中身の濃さだろう！
広辞苑改訂にあたり、ひとつひとつのことばの用例や語釈を検討した人々の話には気が遠くなった。さし絵や、辞書の函などの編集の裏側も知ることができて、読み応え十分だった。(60代 女性)

「ディス・イズ・ザ・デイ」

津村記久子／著

朝日新聞出版 2018 年刊 913.6/ツ

39歳にしてサッカーの面白さに気づいたちょうどその頃、大好きな作家津村記久子氏がサッカーの小説を出してくれた。サッカーの小説と言っても、2部リーグを応援する人のお話。22チーム、22人のサポーターのそれぞれの日常が非常に愛おしい。装丁も可愛く、表紙をめくると22チームのエンブレムが描かれている。好きでなければ、ここまで凝れないと思う。日常に少しだけ光を当ててくれる。私にとってスタジアムへ行く事と津村氏の小説を読むことは似ている。(30代 女性)

「活版印刷三日月堂 1」

ほしおさなえ／著

ポプラ社 2016 年刊 B 913.6/ホ

舞台は川越にある昔ながらの活版印刷所。一文字一文字活字を拾って印刷する作業。それはパソコンの文字とは別物の温かみや優しさが込められていて、訪れるお客様の迷いや悩みを解きほぐしていく。読後、三日月堂さんを訪れたくなったほど、癒されました。(50代 女性)

「極夜行」

角幡唯介／著

文藝春秋 2018 年刊 297.8/カ

北極に近いグリーンランドのまっ暗闇の世界を著者とそりを引く犬の1人と1匹だけで探検するのだが、道に迷ったり、食料がなくなったり、寒さが半端なかったり、もう死ぬかもしれないという絶望感がすごい。食べるものがないときに犬が食べたものにもびっくりする。(60代 女性)

「武蔵武士を歩く」

北条氏研究会／編

勉誠出版 2015 年刊 213.4/ム

図書館で地域の歴史に関する本をさがしていた時、見つけました。平安末期から室町時代にかけての埼玉県内の武蔵武士ゆかりの遺跡や遺物が、かなりマニアックにまとめられています。さっそく平家物語や吾妻鑑の登場人物たちの足跡をたどるのに使わせてもらいました。もちろん川口も載っています。県内最古の宝篋印塔が川口にあるって、知っていました？(40代 男性)

「下町不思議町物語」

香月日輪／著

新潮社 2012 年刊 B 913.6/コ

大好きな作家さんの1人です。発達が少し遅れている男の子をそのまま自然に受け入れてくれる師匠がかっこいい。別に悪い事はしていない。卑屈になることもない。ありのままを堂々と生きる。それは様々なものをかかえながらも自分らしく生きるすべての人に送るエールだと思います。(40代 女性)

「護られなかった者たちへ」

中山七里／著

NHK 出版 2018 年刊 913.6/ナ
心が疲れている時は読まないほうがいいかもしれない。でも、読後、こういう作品だから沢山の人が魅了されたのだと思った。ラストは泣けます。
(50代 女性)

「ヘブンメイカー」

恒川光太郎／著

KADOKAWA 2015 年刊 913.6/ツ

久しぶりに“どハマりする”ファンタジーを読みました。RPG 的かつ現代的な世界観でありながら、設定や人物の感情の描き方が非常に緻密で、途中休憩なしで読んでしまう面白さでした。もちろん、前巻にあたる「スタープレイヤー」もお勧めです。
(30代 不明)

「ロケットガールの誕生」

ナタリア・ホルト／著 秋山文野／訳

地人書館 2018 年刊 538.9/ホ

アメリカにはかつて高度な数学によって宇宙開発を支えた女性達がありました。女性の高等教育が珍しく産休も育休もない。そんな時代に彼女たちは互いに支え合い、不断の努力によって多くの宇宙探査を成功に導いてきました。本書にはその過程が克明に描写されており、自分たちが計算したロケット打ち上げの結果を待つ彼女たちの姿が目に見え浮かびます。
(30代 男性)

「日本国紀」

百田尚樹／著

幻冬舎 2018 年刊 210.1/ヒ

日本は本当に素晴らしい国だと再認識しました。新聞やテレビの報道姿勢もこれからはだんだんと変わってくるのではないのでしょうか。いろいろな意見の人がいるのは当然ですが、多くの人に読んでもらいたいと思います。
(60代 男性)

「舟を編む」

三浦しをん／著

光文社 2011 年刊 913.6/ミ

会社人生を辞書の編纂に捧げた人間の悲喜こもごもを描く。他のセクションではさえない主人公の馬締(まじめ)が、辞書の編纂に携わった途端にその能力を開花していく。辞書を作り上げるまでの壮絶な戦いと真面目すぎる恋心がコミカルでおかしい。
(60代 男性)

「ランニング・ワイルド」

堂場瞬一／著

文藝春秋 2017 年刊 913.6/ト

主人公の機動隊員はアドベンチャーレース出場の直前に妻子が誘拐されたことを知る。レースの現実味あふれる描写があり、チームの仲間に誘拐の事実を伝えない主人公の心の葛藤、レースを乗り越え、事件を解決する際の仲間の絆に胸が熱くなる作品である。
(20代 男性)

「ツバキ文具店」

小川糸／著

幻冬舎 2016 年刊 913.6/オ

現代社会で薄れてしまっている、“人とのつながり”を思い出させてくれるような、心温まる一冊でした。鎌倉の美しい風景や名所も多く登場し、思わず旅に出たくなります。個性豊かな人物ばかりなので、分かりやすく、本が苦手な方にもおすすめです。
(10代 女性)

「夜また夜の深い夜」

桐野夏生／著

幻冬舎 2014 年刊 913.6/キ

世間から隠れ、転居を繰り返しながら暮らす母子。母に昔、何があったのか、娘の視点から段々と解き明かされていきます。とても読み応えのある本で、主人公がたくましく生き抜いていく様に感動しました。
(30代 女性)

「淳子のでっぺん」

唯川恵／著

幻冬舎 2017 年刊 913.6/ユ

女性初のエベレスト登頂に成功した田部井淳子さんがモデルとなっている小説。晩年、がんに侵されながらも「病気になっても病人にならない」と登山家として人生を全うした。そんな彼女にとっての“でっぺん”とは何か？ぜひ読んでみてはいかがでしょう。
(50代 女性)

「死に山」

ドニー・アイカー／著 安原和見／訳

河出書房新社 2018 年刊

786.1/フ

新聞の書評で見て読んでみました。謎解きというより旧ソ連統治下の若者の状況が興味深かったです。本当に原因が判る時は来ないのかも知れません。
(50代 不明)

「AX」 伊坂幸太郎／著
KADOKAWA 2017年刊 913.6/4
題材が殺し屋の話なので、重い話や物騒な話を想像していましたが、実際は殺し屋の男と家族の話でとても心が暖かくなりました。殺し屋の男が殺しを終えて荒んでいる時に、妻が言ったラストの台詞で涙しました。心温まる話を読みたい方にはおススメの一冊です。
(20代 女性)

「奈良町あやかし万葉茶房 1」 遠藤遼／著
双葉社 2017年刊 B 913.6/E
あやかし(お化けや妖怪)が見える体質を持つ彰良と、彼らの交流を描いた心温まる短編集。彰良が詠む万葉集の歌が、あやかしの癒しとして使われているところが新鮮だと思いました。簡単な訳と解説もついています。学生時代、勉強した時にはあまり興味が持てなかった万葉集ですが、久しぶりに読んでみようというきっかけになりました。(年齢性別不詳)

「生れ出づる悩み」 有島武郎／著
旺文社ほか 1979年刊ほか 913.6/7
人生は好きなことだけで生きていくことはできないことを臨場感のある葛藤と共に描き、改めて生きることの難しさ、そして素晴らしさを感じさせてくれました。一度の人生を後悔なく生きたい気持ちは誰にでもあると思いますが、少し足りないくらいが生きた証になるのではないのでしょうか。
(20代 男性)

「乗客ナンバー23の消失」
セバスチャン・フィツェック／著 酒寄 進一／訳
文藝春秋 2018年刊 943.7/7
次々とわかる新事実に驚きながら、読み進めると、クライマックスには更に驚かされました。この終わり方を読み手がどう感じるか…。一読の価値ありです。
(50代 女性)

「失敗だらけの人類史」
ステファン・ウェイア／著 定木大介・吉田旬子／訳
日経ナショナルジオグラフィック社 2018年刊 204/ウ
人類史を見てみると、良かれと思ってした事が、かくも逆に悪くなって来る。その繰り返しだ。英雄たちのした事が全て裏目になって来る。それらについてよくまとめられてある。歴史好きな貴方、一読を。
(60代 男性)

「放蕩記」 村山由佳／著
集英社 2011年刊 913.6/4
恋愛小説が苦手な敬遠していた村山由佳ですが、この小説は娘と母の確執を描いた自伝的小説。読んでみて、共感できる部分も多く感動。母と娘は、「近い」からこそ難しい、と改めて思いました。
(30代 女性)

「捨て犬・未来、天国へのメッセージ」
今西乃子／著 浜田一男／写真
岩崎書店 2016年刊 K 645.6/4
犬はかわいいので捨てられないけれど、「もうかえない」と言って殺処分しようとする人がいる。私は、その人を信じられない。地震などで非難所に入れない犬たちをかわいそうに思う。捨て犬たちを救ってあげたい感動の本だった。
(10代 女性)

「あしながおじさん」
ジーン・ウェブスター／著
ポプラ社ほか 1976年刊ほか 933.7/ウ
いつもは時代物ばかり読んでます。たまに、ほっとするのをと「あしながおじさん」を借り、何十年ぶりに読みましたが、文章が上手なのかやっぱり物語にひきこまれました。手紙をあんな風には書けたらと思います。
(70代 女性)

「たゆたえども沈まず」 原田マハ／著
幻冬舎 2017年刊 913.6/ハ
昨年上野西洋美術館でジャポニズムの展覧会があった。それを観たあとだったので、この本に引き込まれた。本の表カバーはゴッホの星月夜、裏表紙カバーは広重の大はしあたけの夕立。どちらもブルーが美しい。名画誕生のかけに日本人あり。史実をもとにしたフィクションとあるが、読みごたえがあった。
(70代 女性)

「夢の猫本屋ができるまで」 井上理津子／著
ホーム社 2018年刊 024/4
一介のサラリーマンが猫本専門の本屋さんを開店するまでの実話です。「猫×本」のコンセプトの元、猫店員(元保護ネコ)と本の共存、猫カフェとの差別化等試行錯誤する様子が描かれています。又、本の流通や開店資金、収益等についても書かれています。勉強になります。何よりも業者の「町の本屋さんがないようにして」という思いが、本好きな私には、響きました。
(50代 女性)

「小説の神様 上・下 あなたを読む物語」
相沢沙呼／著
講談社 2018年刊 B 913.6/7
売れない高校生作家と文字が書けなくなってしまった高校生作家、そんな二人の後輩の文芸部部員の物語です。前作「小説の神様」の続編にあたりますが、書き手にとっても読み手にとっても、小説が好きの方に読んでほしい作品でした。出版に対しての様々な問題や読み手としても好きな作品を読み続ける為には…、と言った事に関しての一つの正解例を見つけられたような、そんないい作品でした。
(30代 男性)

「この世の春 上・下」 宮部みゆき／著
新潮社 2017年刊 913.6/ミ

江戸時代のある藩の藩主交代をめぐる事件の形を借りて、多重人格を病む若き藩主の心身の闇と世の中の闇に光を射しこませ、真相に迫るミステリー。サイコドラマの絡んだ奥の深い展開に魅せられる。幾重にも重なった複雑な謎解きと、人の心の奥の深さに胸が熱くなる。時代物小説だが、『模倣犯』や『ソロモンの偽証』に並ぶ代表作になるだろう。

(60代 男性)

「かがみの孤城」 辻村深月／著
ポプラ社 2017年刊 913.6/ツ

この本は学校が苦しくて行けない子に少しでも希望が持てるのではないかと思いました。東条さんの言うように「たかが学校」もしかしたら別のところでこの本のような本当の友達が出るかもしれない。誰かが見守ってくれてるかもしれない。全て可能性だけど可能性じゃなく「実際」になるかもしれない。そんな事がぐるぐる頭を回りました。居場所は一つじゃないと思える話でした。

(40代 女性)

「完本春の城」 石牟礼道子／著
藤原書店 2017年刊 913.6/イ

小説『春の城』と紀行文『草の道』が載っているが特に『春の城』がよかった。島原の乱の話で生身の天草四郎が描かれていた。一揆衆が言っていたマリア観音という言葉が慈悲深くて印象的だった。石牟礼さんは水俣病の運動の時に島原の乱のことを思っていたそうだが、その気持ちが伝わってきた。

(50代 女性)

紙面の関係で、お寄せいただいたご感想や書名のすべては掲載できませんでした。

ご協力いただきました皆様、ありがとうございました！



- 「十三階の神」吉川英梨 ○「炎の塔」五十嵐貴久 ○「バッテリー」あさのあつこ
- 「やさしいねこ」太田康介 ○「オバさんになっても抱きしめたい」平安寿子 ○「山月記」中島敦
- 「葵の残葉」奥山景布子 ○「今日は何の日」PHP 研究所 ○「弾左衛門とその時代」塩見鮮一郎
- 「バテない体をつくる登山食」大森義彦 ○「月とアポロとマーガレット」ルーシー・ナイズリー／え
- 「羊と鋼の森」宮下奈都 ○「海岸通りポストカードカフェ」吉野万理子 ○「対岸の彼女」角田光代
- 「まじよのナニーさん」藤真知子／作 ○「絶対に行けない!世界の秘境 101」アフロ …ほか